

紀 要

第 3 号

目 次

序

1. お米を作りだしたころ……………(浜崎悟司・細川修平・奈良俊哉)
 2. 滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について……………(吉田秀則)
 3. 手焙形土器雑想
—葛籠尾崎湖底遺跡出土品に寄せて—……………(小竹森直子)
 4. 三つの古墳の墳形と規模
—近江における古墳時代首長の動向および特質メモ作成のために—
……………(用田政晴)
 5. 野洲川下流域の古代豪族の動向
—近江古代豪族ノート4—……………(大橋信弥)
 6. 満願寺廃寺出土瓦の産地……………(三辻利一・北村大輔・北村圭弘)
 7. 信楽と丹波……………(松澤 修)
 8. 人形茶碗・人形手茶碗
—考古学的視座からのアプローチ—……………(稲垣正宏)
-

1990. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

4. 三つの古墳の墳形と規模

— 近江における古墳時代首長の動向および特質メモ作成のために —

用田 政晴

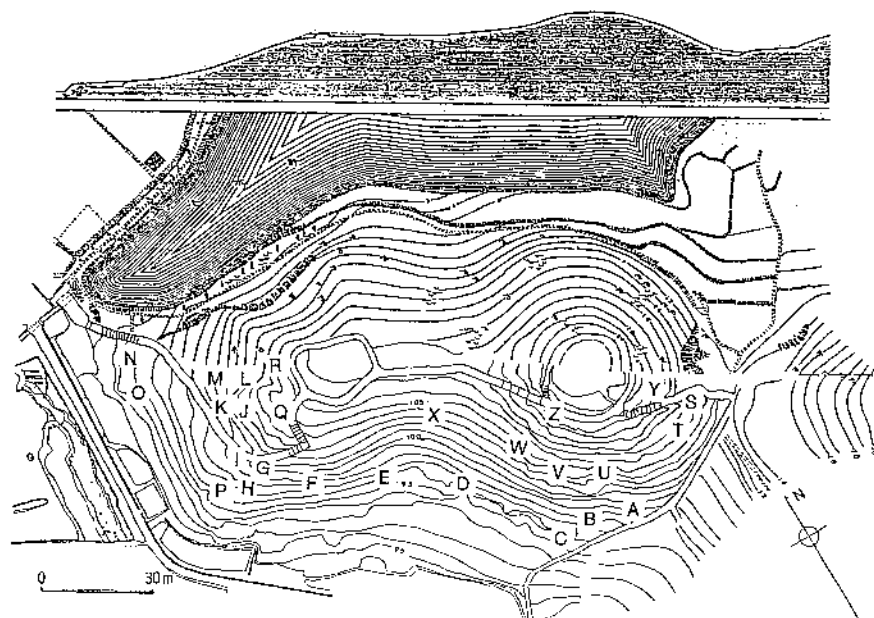
1. 三つの古墳

(1) 安土瓢箪山古墳

蒲生郡安土町桑実寺に所在するこの古墳は長い間、近江で最古・最大の前方後円墳として知られてきた。

1935年、前方部において2基の箱式石棺が発見されたのを契機に、翌年、後円部の3基の竪穴式石槨が調査され、その2つの調査の報文で梅原末治は、この古墳は全長「約535尺」とし、それ以降、全長「約162m」を計るものとされてきた⁽¹⁾ この約535尺は報文の測量図を見ると、切断された支尾根部分からその先端まで含んだ数字である。ところがこの支尾根最先端の形状は、前方後円墳の前方部先端形状とはほど遠い自然地形となっており、その等高線ラインは墳丘主軸に対して乱れている。

近年、墳丘南半部分だけではあるが、安土町教育委員会の手で測量が実施され、その概略も報告された⁽²⁾ また、今回その詳細な原図を町の御好意で見ることができた⁽³⁾ とりあえず公表されている図を1938年公表の報文図版と合成したものが第1図であり、この図と現地での形状観察をも



第1図 安土瓢箪山古墳測量図 (註(1)一bと註(2)の測量図を合成)

とに、この古墳の墳丘と見直してみたい。なお、方位は1938年報文図版のもの、スケールは町教育委員会作成のものを採用している。

墳丘の形状規模を見る場合、前方後円形をたどるラインをとるのを基本とすべきであり、そうした意味では後円部南半の等高線は全て尾根切断部を超えて丘陵頂部方向に逃げていくが、支尾根切断部の位置は現在も1936年当時のままであり、その位置は明らかである。ここから南西方向に下る現在の山道も当時のものである。このラインは古墳北半の形状からも後円部裾に相当することが認められる。

さて、この山道から北西方向に伸びる等高線のうち、Aの97m等高線付近に一つの斜面の変換点が認められ、それは後世に半月形に削られたB付近からCへと続く。斜面変換点はこのCの96mラインからD、Eの97m等高線付近、及びFへと続いていく。これら、特にC・D間の95m等高線と、DからFの下方93m等高線を結んだラインより下方は、その斜面がゆるやかとなり、平坦に近い状態となっている。

次に、G・H間はかなり急角度となっており、等高線で表現すると相当つまったものとなり、その裾ラインはHからIへと伸びる。この急角度は、J・K間でも認められるため、A～Fへと伸びてきた墳丘裾ラインは、H・I・K・Mへと続くものと考えられ、この前方部先端の形状は、後世に設けられた散策道のIから北東を望めば容易に観察できる。なお、I・N・Oを結んでできる三角形内は、平坦に近い状態で、P付近で直角に近く曲がっていく地形は見当らないのである。

また、Q・R内の104m等高線以下も急に落ちており、Qのすぐ北東部分は、若干の平坦地形が残っているため、このラインが前方部墳丘上の先端と考える。

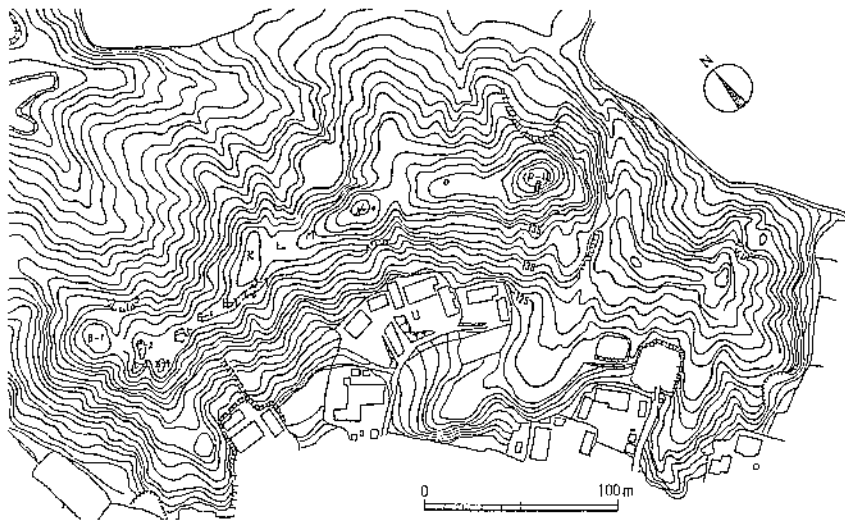
現在、S・T間、U・V間、W・X間それに、Y・Z間に、細長い平坦面とおぼしき部分が認められ、段築の痕跡とも考えられるが、1981年頃、墳丘をめぐるように一部手が増えられたことがあり、その判断は保留しておきたい。

以上、古墳の南半部を中心に墳丘観察を行った結果、全長約137m、後円部径約78m、その高さ約16m、前方部先端幅約61m、その高さ約9m、くびれ部幅約50mという数値が得られた。そして、前方部先端は中ほどがやや突出した形態をとり、後円部3段、前方部2段築成の可能性を残すと言うことができる。

(2) 北谷11号墳

草津市山寺町に所在するこの北谷古墳群は、1960年、名神高速道路建設の土取り工事に伴い調査されたもので、現存しない。調査の概要はすぐに公刊され、その中の11号墳も甕石を備え、粘土槨内に仿製方格規矩鏡、鋏形石、鉄剣、鉄刀などを副葬した円墳であることが明らかになっている⁽⁴⁾。

1980年になり、鏡と埴輪を中心に種々の副葬品のセット関係から、古墳編年の良好な資料としてこの古墳を用いた中司照世・川西宏幸は、その墳丘形状についても見直しを行った⁽⁵⁾。それによると、11号墳の南東の尾根を切断するような谷状部と古墳の北西方向に細長く伸びる尾根部(第2図O地点付近)の存在から、これを全長105mの前方後円墳と考えた。確かに概要報告記



第2図 北谷古墳墳周辺地形図（註(4)による）

載の地形図を見ると11号墳は一見して前方後円墳ではないかと思われ、埴輪・葺石を備え、これだけの鏡をはじめとする副葬品をもつ古墳は、前方後円墳に相違ないと考えるのも無理からぬことと思われるが、にもかかわらず、調査担当者が第2図O地点も調査しながら、あえて円墳としたことについては注意が必要である。以下、当時の調査担当者からの御教示の内容をもとに、第2図を見ながら周辺地形について略述する⁽⁶⁾

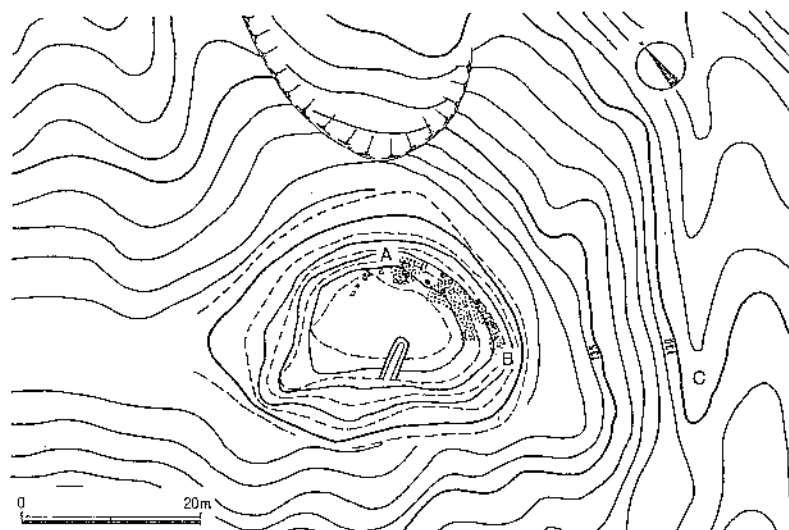
この古墳群は東西方向の尾根上に築かれているが、この尾根より南半は大きく崩壊しており、かつての地形とは大きく異なっている。小規模な崩壊面は第2図の各所に認められるし、O-P-11の南西下方の支尾根状に見える部分は、大規模な地形崩壊後の堆積土である。また、概要報告書によると4号墳から10号墳まで全て崩れており、その遺存状況からも、単なる盗掘とか、墳丘のみの崩壊とは考えがたいほど大規模なものであったようである。一方、11号墳の墳丘上にはかつて阿弥陀堂があり、前方部状に北西へ伸びる尾根も参道として利用されており、この部分についても手が加わっていた可能性がある。

発掘調査時作成の11号墳墳丘測量図に第2図の11号墳付近を合成したものが第3図である。破線を含む部分が調査時の測量図であり、絶対高は入れられないものの、破線と実線との間隔は50cmである。なお、小ドットは葺石であり、大ドットは埴輪である。これによると、古墳の南西半は崩れており、中心主体も半分しか遺存していない。葺石・埴輪の遺存状況も考え合わせると、調査時には古墳の東半部の一部しか元の墳丘を保っていなかったようである。

この葺石の分布の下限を見ると、およそ現存墳頂部から1.5~2.0m下ったラインに揃っており（A~B）、ここより下方には一切葺石・埴輪とも検出されなかったとの事である。したがって、調査時にはこのあたりを墳丘裾ラインに相当すると判断されたようである。このA~Bラインをもとに径を復元すると直径32mとなり、その中心点は中心主体北側辺延長上に位置する。中司氏が前方後円形をたどる根拠の一つとされた谷状部（C）は、130mよりさらに下方であり、ここ

までは葺石裾ラインからさらに10m以上、下らなければならない。また、前方部とされたO地点付近の尾根上にも何ら古墳に関係するとおぼしき施設・遺物とも認められなかったのである。

ここでは、この葺石及び埴輪の分布ラインをもとに径を復元して、北谷11号墳は径約32m、高さは阿弥陀堂建設時の整地のため約2m以上の円墳と考えるべきと判断される。



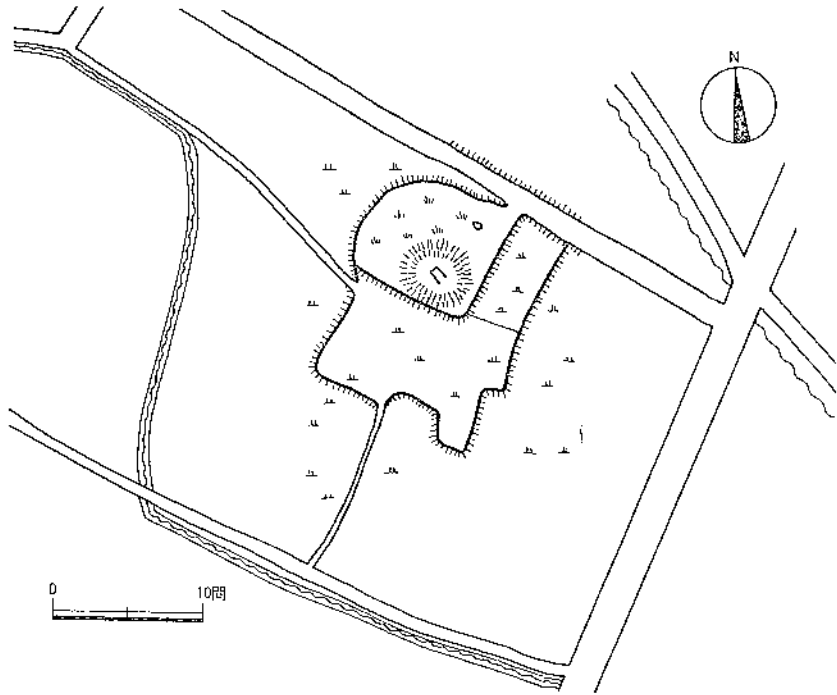
第3図 北谷古墳墳丘測量図（第2図の一部に、調査時測量図を合成）

(3) 鴨稻荷山古墳

奈良県藤ノ木古墳の調査時には、共通する副葬品を多く持つ高島郡高島町鴨所在の稻荷山古墳は、それとの比較の中でたびたび取り上げられた。横穴式石室内に置かれた大形の家形石棺は藤ノ木古墳と同じ二上山白石凝灰岩製で、鏡・太刀のほか、金銅製冠・沓・魚佩・金製耳飾などの朝鮮半島の影響を受けた種々の副葬品は、継体天皇関係の出自の中で説明されてきた。

この古墳は、1902年、県道の土取りの際に発見され、遺物は帝室博物館に届けられたが、京都大学の調査は、21年後の1923年になって実施された。この調査の浜田耕作・梅原末治の報文⁽⁷⁾によると、記述中では明確な断定を避けながらも、古い地籍図をもとに前方後円形の復元案を図で示し、それ以降、全長「約25間」（45m）の前方後円墳として広く知られるところとなったが、その根拠は地籍図に加えて、同時期の古墳である熊本県江田船山古墳が前方後円墳であることから、これも同様のものに違いないという、いわば先入観が働いていることが文章から読み取れる。

その後、1979年に坂井秀弥をはじめとする関西学院大学考古学研究会のグループの手によって詳細な測量図が作成された⁽⁸⁾。この時にも、かつての京大の報文中の図面も比較検討する中で、浜田らの数値を追認しているかのようなのである。京大の報文中の図面、及びこの詳細な測量図を見ると、確かに南方向に前方部状に伸びる地形は認められるが、定式化した、あるいはまともな前方後円墳としての前方部の形状が、特にその先端付近において必ずしも明らかでない。



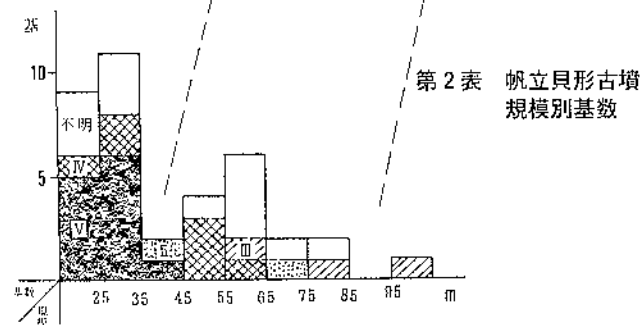
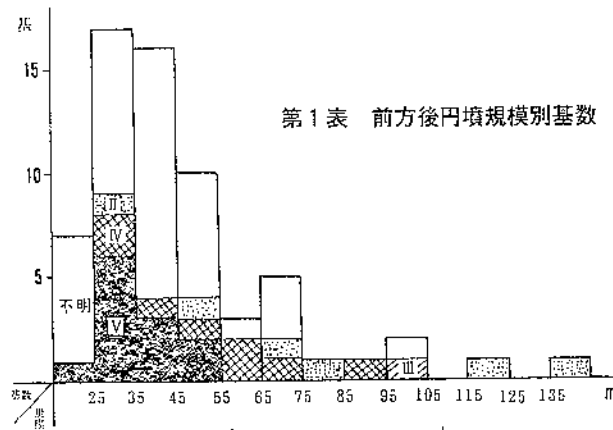
第4図 鴨稲荷山古墳、京大報告(註7)地形図
(図版第二の本図に左上挿入図を合成)(スケールは修正)



第5図 鴨稲荷山古墳測量図(註8)に加筆訂正

坂井らの検討の中で、京大調査時と現状は大きな変わりのないことが確認されており、京大報文中の図版第二・本図左上挿入図に示された墳丘は、ほぼ現況の測量図の中でも認められる。この図のとおり素直に見れば、円墳に短い前方部が取り付けいた帆立貝形古墳になるのである。にもかかわらず、それより長い前方部と考える根拠の一つには、第5図の古墳西側に見られる水路の存在があるのではないか。これが京大復元前方部と平行して走り、その長さもそこそこあること、それに前方部の延長上で直角に曲がることからこれを周濠に伴うものとし、前方後円墳と考えるのではないだろうか。

第4図は京大報告図版第二の本図に、その左上挿入図を合成したものである。これを見ると、今述べた水路の位置は当時少し斜め方向にずれており、現在の位置でいうと第5図に示した位置にくる。また、第5図の測量図をもとにレベルを拡大して示したのが第五図b-b'断面図である。ここで明らかに見えるように、京大報告挿入図に示された墳丘そのものが浮かび上がってくる。どう考えても、第5図中でいう92.02m地点付近が前方部先端となる。残る障害は古い地籍図である。ところが京大報文中では、はっきりとした前方後円墳とする読取りの記述には少し躊躇が見られ、実際、前方部墳丘崩土の痕跡と見ることもできる。ここは素直に全長約35m、後円部径約27m、前方部幅先端幅約23mという短い前方部が取り付けいた帆立貝形古墳と言うべきだろう。



2. 首長墓のレベル

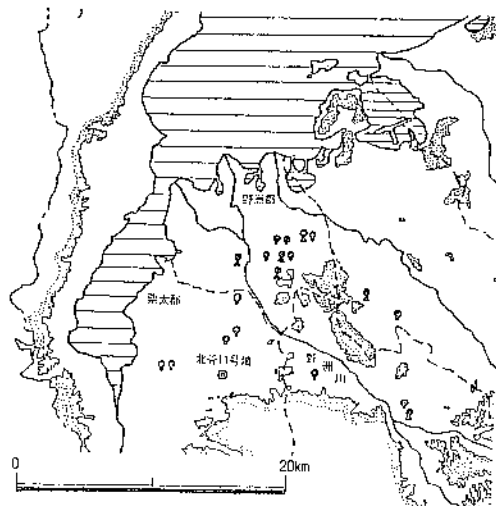
第1表は近江の前方後円墳の規模とその基数を示したものである。全長は約137mと短くなくても安土瓢箪山古墳は近江で最大の古墳である。そして1位と2位の規模にこれまで約40mの差があったものが似通ってきた。瓢箪山古墳に続くのは全長約122mの膳所茶臼山古墳であるが、似ているのは規模だけでなく、川西編年Ⅱ期の埴輪をわずかながら持ち葺石を備えている点で共通している。また沃野を控えず、まともな弥生集落もない無人の荒野に突如琵琶湖に向かって低丘陵上に築かれている点までも加えることができる。よけいにこれら2基を1グループとして扱いやすくなった。そして全長105~65m、45~25mを中心とするグループの3つの首長墓群が認められるが、これら3つのグルーピングは第2表の帆立貝形古墳の規模別基数の方がより容易に読み取れる。

第1表、第2表はその所属時期を無視しているが、近江での定式化した最古の前方後円墳は、122~137m程度の最大規模でもって、近江の中枢をはずれて湖の東と南に、畿内より遅れて出現したということ是可以する。

3. 首長墓の地域性と画期

北谷11号墳が円墳であると再確認されるに至って、野洲川下流域左岸の旧栗太郡内に前方後円墳は皆無となった。古墳時代初頭の「前方後方形周溝墓」を除くと、他の首長墓、ほぼ18基はすべて円墳か前方部の短い帆立貝形をとる。栗東町大塚越古墳（消失）は唯一の例外かとも思われるが、地元に残る地籍図を見ると「前方部」とされる畑の地割は短小なものであり、円墳か、仮に前方部を備えていたとしても短いものとなる⁴⁹⁾。

一方、野洲川下流域右岸を中心とする旧野洲郡内の首長墓18基を見ると、旧栗太郡内の首長墓と同様に円墳と帆立貝形古墳のみで展開しておりこの点で共通するが、5世紀後葉以降になると



第6図 野洲川下流域の前方後円墳と帆立貝形古墳配置図
(○：帆立貝形 ㊦：前方後円墳)

前方後円形を採用するようになる。地域性を論じる時、しばしば〇〇川流域と総称してしまう場合もあるが、左岸と右岸を区別した方が良い場合があることを教えられ、特に古墳時代の首長の動向については、さらに旧郡域を念頭に置いたほうが良いことを知った。

それはさておき、第3表を見るまでもなく、野洲川下流域は、弥生時代以降古墳時代に至るまで近江の中核地域であることは否めない。この地域の首長墓が、古墳時代の当初から円墳で埴輪を持たず、粘土槨を内部主体として備えることは、近江の古墳史の最大の特徴であり、これはしばしば、船載の三角縁神獸鏡を中心とした鏡を副葬している。

こうした首長墓の在り方に近いのが蒲生郡と高島郡である。今、高島郡内に8ないし9基の首長墓を認めるとするが、鴨稻荷山古墳を帆立貝形古墳と認めるに至って、ここも確実な前方後円墳がなくなってしまった。不明の一つを除いて全て帆立貝形古墳あるいは造り出し付きの円墳と考えられる。蒲生郡の日野川流域も確実な例だけで言うと、円墳・方墳・帆立貝形古墳のみで首長墓は築かれて行き、前方後円墳を採用するのは須恵器のMT15式期まで待たなくてはならない。そういう意味では、高島郡では粟太郡的であり、蒲生郡の日野川流域は野洲郡的である。

あわせて近江全体を見ると、古墳時代において1ないし2の旧郡単位での地域性は明らかである。近江では古墳時代の当初から、埴輪を持たない円墳と粘土槨を備えたまま前方後円墳体制ともいうべきものに組み込まれており、その後に定式化した前方後円墳が、その近江中核の首長達の本貫地をはずして築かれる。一方、坂田・浅井・伊香郡など湖北を中心とする地域は、当初から前方後円墳を採用し得ており、最後まで前方後円墳を築いたのも坂田郡内の首長であった。近江の古墳史における両期は安土瓢箪山古墳と野洲町天王山古墳を築いた2つの時期に求められるかも知れない。

註

- (1) 梅原末治「近江安土瓢箪山古墳」『日本古文化研究所報告』4 1937年、同「安土町瓢箪山古墳」『滋賀県史蹟調査報告』7 1938年
- (2) 安土町教育委員会『安土町内遺跡分布調査報告書』1987年
- (3) 石橋正嗣、西家淳朗両氏の御好意を得、また御教示も受けた。
- (4) 滋賀県教育委員会『草津市山寺町北谷古墳群発掘調査概報』1961年
- (5) 中司照世・川西宏幸「滋賀県北谷11号墳の研究」『考古学雑誌』66-2 1980年
- (6) 調査担当者の西田弘先生の御好意で測量図等を見せていただき、種々の御教示を頂いた。
註5に対する西田先生の御意見は、「滋賀県下の古墳出土鏡について(1)」『滋賀文化財だより』51 1981年に記される。
- (7) 浜田耕作・梅原末治「近江国高島郡高島町水尾村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』8 1923年
- (8) 関西学院大学考古学研究会(文責 坂井秀弥)「高島郡高島町鴨稻荷山古墳現状実測調査報告」『滋賀文化財だより』22 1979年
- (9) 大橋信弥氏の御紹介と原田上氏の御教示を得た。

編集後記

本号には8編の論考を掲載することができました。職員の頑張りに頭が下がる思いです。ただ、少し気になることは、既刊寄稿者が多いということです。次号への課題といたしたいと思います。

翌年度は協会設立20周年。さらなる充実を期し、思いを新たにして出発いたします。今後ともご協力のほど、宜しくお願いします。
(普及啓発事業担当)

平成2年3月

紀要第3号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大菴町1732-2
TEL(0775)48-9780・9781

印刷 大津紙業写真印刷株式会社
大津市月輪三丁目9-33
TEL(0775)44-0190(代)